

さよなら  
こんにゃく



かよふなら

こんどかへ

目次

セレンディピティー 6

CHILDREN 41

聖家族 105

ちよなご 165

セレンディピティ

石渡さんの部屋は、存外男っぽい匂いがした。

というと語弊があるかもしれない。正確には、女っぽい匂いはそこまでしなかった。乾燥した、冬の日差しが埃をかぶってそのまま封じられたような匂いだ、と、言おうと思いつながら私はお茶を用意する石渡さんの背中に話しかけられないままにいる。

中学生にしては破たんしていると思えるほど、部屋は広がった。真ん中より窓際に大きなグランドピアノが置いてあるのだから当然だけれども、ピアノがあることで部屋はより、その広さは強調されていた。壁にクロゼットはなく、木目調の小さなカラーボックスが三つ綺麗に並んでいる。あの中に服が全部入っているとは思えなかった。でも、あの中に石渡さんを彩るであろう美しい服がそこにぎゅちりと入っていても私は驚かない気もする。部屋にあるのは、あとは、折りたたまれた薄いピンク色の小花柄の布団。漆黒のグランドピアノの横に布団がある光景を、私は、後にも先にも見たことがない。

突っ立ったままの私を後目に、石渡さんはピアノの傍に置いてあったキャスター付きのチェストテーブルをごろごろと動かして自分はピアノの椅子に腰を下ろした。カラーボックスと同じ明るい色の木目をしたチェストの上には、いつのまにかポットとガラスのティーカップが二つ、白磁のティーポットが一つ、ちゃんと乗っている。

「ティーコゼー、この間汚しちゃったのよ。紅茶こぼしちゃった」

「……なくても、あっても」

「格式ばったエグレス人はああいうのにこだわるのよ。それに、あれがあった方が蒸らす時間が無駄にならないわ」

何がおかしいのか、石渡さんはくすくす笑った。

石渡さんと会ったのは、最近できた駅前の紅茶専門店だった。日曜日、何もすることがなかった私は、ふらふらと駅前の本屋に行き、ドーナツを食べ、なんとなく茶葉の紅茶が飲みたいと思ってその店に入った。以前、家庭科の授業でポットで入れた紅茶がおいしかったのを思い出したのと、ファストフードのドーナツは好きだけど口先に残る甘さが苦手だったか

ら。

店内は静かなクラシックが流れていて、壁は真っ白、カウンターのようなところに袋詰めされた無数の紅茶と香りのサンプルが置いてあった。店員は若い女性一人だけで、白いブラウスに若葉色のエプロンをつけている。静かに何か、作業をしていた。出たい。入った瞬間にそう思ってしまう。何も、こんな本格的なお店に入ることにはなかったのだ。スーパーに売っている、安いティーバッグでいい。引き返そうと思って振り向くと、そこに石渡さんがいた。石渡さんの後ろには金色に輝く、牛乳瓶をもっと寸胴にしたような缶が、天井まで区切られたスペースにずらりと並んでいた。その明るさがバックライトになって、石渡さんの姿を煌びやかに反射する。石渡さんの周りだけ別世界、というよりも、私だけが別世界だったのだからと思うほど、石渡さんは店の内装にすっぽり馴染んでしまうぐらい綺麗だった。

石渡さんは白い丸襟のついた、サテン地のワンピースを着ていた。店内の淡い光に、サテンの細かい生地がきらきらと輝く。紺色が虹色に見えた。対する私はさえないメガネをかけ、着古したトレーナーにジーンズという出で立ちで、クラシックよりも横断歩道の信号から流れるとおじゃんせの方がお似合いな格好だ。



「いらっしゃいませ。ご試飲はいかがですか。ミルクティーにぴったりのアッサムロイヤルです」

女性の店員がカウンターの奥からやってきた。手には小さなお盆を持ち、その上には白い小さな紙コップが乗っている。石渡さんはごく当然のようにその細い指でコップをお盆から持ち上げ、三口で飲み下した。私はなかなか手が出ず、結局曖昧に首を振って断った。

「飲まないの」

「……いいの」

石渡さんは笑いもせず、怒りもせず、無表情のまま私の傍を通り過ぎ、ディスプレイされていたガラスのティーカップを眺め始める。私はそつと後ずさりしながら、ドアについたベルが鳴らないように慎重にノブに手をかけてゆっくり店から出て行った。お店の外は大通りに面しているから、車の音がうるさく、クラシックなどとは無縁の世界だった。どこかから、とおりゃんせが聞こえてくる。私にぴったりだ。

次の日、廊下ですれ違った人に腕を掴まれた。細い指が思いのほか強い力で私の腕にめり込む。図書館に返そうと思った本が二冊、腕から落ちて行った。その音に、他の生徒も私た

ちを見た。恥ずかしくなって俯く。でも、石渡さんにそんなことは関係ない。深刺と笑った。

「やっぱり同じ学校だった。見たことあるなど思ったんだよね。紅茶好きなの？」

「え、いや、別に……」

「そうなの。つまんない。どこ行くの？ 図書館？」

下に落ちた本に張り付けられたバーコードをちらと見て、私の腕をつかんだままの石渡さんは尋ねた。私はそっと頷く。丹精な顔がぐいと近づいて、頬にある金色の産毛がさらりと光った。毛穴がない。

「私も一緒に行く」

「え、」

「あなた、えーと、それ、なんて読むの。サカン？」

胸についた名札を、石渡さんはじっと見た。

「さぬき、です」

「さぬき、下は？」

「紅子、ベテコです」

「べにこー！ ねえ、知ってた、紅茶って紅色のお茶って書くのよ」  
腕が圧迫から解放され、石渡さんはごく自然に床に散らばった本を拾った。さっきまで思いきり力をこめていた指は白く、しなやかに動いていた。

それから、クラスも違うのに石渡さんは休憩時間にはちよこちよこ私のところに来て、紅茶のハウツー本なんかを持ってきては時間いっぱいまで紅茶のことを話して帰っていく。なつかれる、という言葉がぴったりのように思った。見た目はロシアンブルーのような高貴さがあるのに、何度も私のクラスにやってくるその姿はまるで柴犬のようだった。

他のクラスは境界が張ってあるようで入りづらいと感じる私とは違って、石渡さんはそんなもの全く感じないのだった。いつも席で本ばかり読んでいて根暗な私はよくも悪くも誰の興味も集めなかったのに、石渡さんが飄々とクラスに入って私の席へ来るようになって、クラスの意味はそれとなく私の方へ集まっているのはよくわかった。

「ねえ、佐貫さん、石渡さんと友達なの？ 仲良しだよね？」

次の授業が体育のときの休憩だけは、さすがに石渡さんはやってこず、その代わりなのか

C  
H  
I  
L  
D  
R  
E  
N

彼と一緒に暮らそうと言ったのは三か月前、新居が決まったのが一か月前で、引っ越してきたのは一昨日だ。三日間、私たちはお互い休みを取って、荷解きをし、新しい生活に少しだけ心躍らせた。

「なんか、甘いものでも買いに行こうか」

「いっよ」

平日の午後、私たちは悪いことをしている気分だね、などと笑ってコンビニへと繰り出した。今まで住んでいた町を離れ、私と彼、互いの職場の中間地点の駅近くにした。通り道として通ったことはあっても、住む町としてみたことはない。ここにこれがある、ここにはこれがある、などと私たちはまるで付き合いたての若いカップルのようにはしゃいでコンビニへと歩いた。

帰り道は違う道を通ってみよう、という彼の提案によって、行きとは反対方向からアパー

トへと帰った。行きに通った道は商店街のようにこまごました店が並んでいたけれど、反対側は住宅街で、平日ということもあり、静まり返っていた。たまたま、小さな子どもの声や家の中を走り回る音がして、私と彼以外に、この場所で生きている命があるということが、不気味だった。

「公園、あるね。あ、児童館だ」

彼の声に顔を上げる。ブランコと砂場だけがある小さな公園の横に、児童館があった。児童館、という響きを何年ぶりに聞いたのだろうと思うほど、忘れ去っていたその言葉にめまいすら感じそうになる。早い時間に帰ってくる低学年の小学生たちが、児童館できゃいきゃいと高い声を上げて走り回っていた。無邪気な顔の、小さな生き物。私は、ガキが苦手だ。彼は私の顔が硬直していることにも気づかず、子どもはかわいいね、などとのたまった。私ができるだけ児童館の緑色のフェンスを見ないようにして、そうだね、と、声だけで返事をする。

児童館には不潔なイメージしかない。私の小学校近くにあった児童館には小汚いガキばかりが集まっていたからかもしれない。小汚いガキどもは大半が近所の県営住宅に住んでいた

けれど、その県営住宅は不良といじめられっこの巣窟だった。不良の子供は放っておいてもどこかしらで遊び回っているけど、いじめられっこには安全で安心な遊び場が必要になるらしい。学校内で嫌われていて汚らしいガキはよく児童館に集まっていた、と思う。大半がいわゆる鍵っ子とかいうやつで、首からヒモで鍵をぶら下げていた。その貧相なこと。

私の家や友達の家は、母親が専業主婦だから昼間も家にいるしもちろん下校時刻の頃には夕飯の準備をしていたりする。けれど県営住宅にすむいじめられっこの家は彼らが体現しているように貧相で、ゆえに親は共働きだ。下校時刻になっても親はいない。首から下げられた鍵はその印であり、それでも強く生きるのだと聞いてもないのに癩に障る主張でもあった。

アクセサリーひとつもしない小学生にとっては、首から下げる鍵は何か艶めかしいアイテムにも見えるのか、同級生のうち何人かは憧れを口にしたりもしていた。でも、私や私の友人は小馬鹿にしていた。首から手芸センターで買ったヒモで鍵を下げているなんて、貧乏の証だと思っていた。私も、たまに両親ともがいないときがあったけれど、朝に持たされる鍵はルイヴィトンのキーケースに入っていたし、友人が持たされていたキーケースはグッチだった。その時にブランドの名は知らなかったが、あのヒモよりも何倍も意味も価値もあるのだ

と、私たちは知っていた。わかっていた。

汚らしいガキが児童館にいと我が物顔なのがまた気に食わなかった。そういう子らの服は全部毛玉だらけで、色褪せていて、日向に当たりすぎた匂いを発していた。汚いのではなく、汚らしかつた。汚らしくて、凶々しくて、意味も価値もない。児童館は私の中でそういう場所だったし、子どもができてでも絶対に行かせない。

児童館で働くおばさんも嫌いだった。市の職員だか保育士だかそれも曖昧だし今でもわからないが、とにかく高圧的で鍵っ子ばかりを優遇していたような気がする。なぜ、私より汚らしくバカな子どもが最優先されるのか？

でも、次の瞬間には気付く。

ああ、私はあんな子どもたちよりも高尚で価値ある人間だから、あんなおばさんに構われなくとも一向にかまわない。あれは価値の低いおばさんで、価値の低い子どもの相手で一杯一杯なんだ。

「紗枝は、子ども何人ほしい？ やっぱり二人が妥当かな？」

児童館の脇を通り過ぎると、彼がそう問うてきた。彼はこういうことを平気で聞いてくる。



俺はね、と楽しみに話す彼に相槌を打ちながら視線を感じて児童館を振り返る。フェンスごしにいかにも三日は風目に入ってなさそうなガキが私を見ていた。眉間にしわを寄せるのと同時に、ガキの後ろからピンク色のエプロンをつけた女がやってきてガキの肩にぽんと手を載せた。なにやら話しかけ、ガキが応えると女は顔を私たちの方に向ける。立ち止まった私に気付き、彼が少し先で振り返る。

「紗枝？ 紗枝ちゃんだよな？ 私だよ、しの」  
「はい？」

女は親しげに私の名を呼んだ。  
しの。

私の頭はフル回転して、一度だけ行った児童館の内装を思い出した。

目の前には薄いピンク色のスウェットを来ている女の子がいる。毛玉だらけで、胸にプリントされたキャラクターははがれかけてもはや何かわからなかった。首からほつれたショツキングピンクのヒモをぶらさげ、その先には古い形のカギがついていたはずだ。学校では萎縮して、話しかけてこないくせに児童館では我が物顔で私にルールを教えようと躍起になっ

ていた。そういうところが妙に鼻についた。意味もなく、理由もなく嫌いだった。

むらまつしの  
村松史乃。

私はなんとなく頬を引き上げた。彼が不思議そうな視線を向けてくる。顔に穴が開きそう  
だ。これ以上見ないでほしい、とは、言えない。

「史乃だよ、村松史乃。やだ、久しぶり、このあたり住んでるの？」

「知り合いい？」

彼がやってくる。ここで彼がいなければ、私は彼女の声など聞こえないフリをして通りす  
ぎることができるし、耳が悪い人になりきれたかもしれない。だけど、彼は私の聴力が健全  
であることを知っているし、彼女が私の名前を呼んだのをしっかりと聞いている。

「うん、わかるよ。村松サン、ね、小学校の同級生なの」

「中学校も一緒だったじゃん」

彼女はえへへ、と笑った。正直、私はこいつと中学校まで一緒だった記憶がないので、忘  
れたフリではなかったのに、今の一言で嘘くさくさになってしまったように思えて、彼から視線  
を外し、史乃を見た。化粧をしていないようだし、後ろでひつつめた髪の毛はほつれている。

# 聖家族

「サグラダさんの名前、本当はなんていうんですか」

うるさい店内で私はそう、声を張り上げた。私の正面に座る、神経質そうなサグラダさんは無表情で、私の問いに答える気があるのかわからないのかよくわからない顔をしている。聞こえないのか、聞こえているのか、それすらもわからない。お酒を飲んでも知らない人がいると酔えないので、私は心が折れそうになりながらも、気になるのもう一度言う。

「サグラダさんの名前、本当はなんていうんですか」

「サグラダです」

「は？」

真顔でふざけてるのか、私の言葉を理解していないのか、とにかくわかるのは彼の表情筋が固いということだけで、よくもまあこういう人にあんな感情豊かな彼女がいるものだと思う。シルバーフレームのメガネも相まって、彼はますます冷酷な人に見えた。

「はい、じゃ、とりあえず出よう」

お手洗いから戻ってきた零士れいじは何が楽しいのかにこにこ笑っていて、同じくお手洗いから帰ってきた美紀子みきこちゃんもにこにこ笑っていて、私は二人が本当は一緒にトイレに入って何かいやらしいことでもしていたんじゃないかと想像してしまうほどには性格が悪い。すつきりして出てきたんじゃねーの零士、と思いつつ、まあ私は処女なので関係ないですけど、と自分に言い聞かせる。壁側——サグラダさんと美紀子ちゃんが座っていた方にかけてある私たちのコートを零士が受け取り、それをまた私が受け取る。冬のボーナスが出たときに買ったスナオクワハラのガリウールのコートがずしりと重い。今日は個室の居酒屋だと聞いていたからそんなに匂いも移らないと踏んで着てきたのに、ついしてみたら座敷がメインの居酒屋で、しかも席は小さな衝立で区切られているだけ、煙草の煙も揚物の匂いもとにもかくにもごちゃまぜで、そりゃご飯はおいしかつたけど、コートに匂いがつくことを加味するとプラスマイナスマイナスだった。もたもたとコートを羽織る間に、零士も美紀子ちゃんも座敷から降りて行ってしまおう。二人とも、軽いダウンジャケットを着ていた。もしかしてそれってお揃いなのかなと後姿を見つめていると、上り框に腰を下ろしていたサグラダさんがふいに

振り向いて私に言った。

「サグラダです、名前」

「は？ 嘘でしょう」

「嘘ついてどうするんです。サグラダです」

まだこいつ真顔でふざけるのかと思つて苛立つ。しかもこの真冬に、彼はグレーのパーカと真っ青なマフラーしか身に着けていない。冬の寒さをなめてやがる。私はサグラダさんの隣に腰を下ろし、ブーツを履いた。スナオのコートの十分の一の値段のブーツは、座敷で座り続けた足にはきつい。そのことにまた苛ついた。

零士が従姉妹のえみちゃんたちと飲みに行こうと言つたからついて行つたら、本当は大学時代の友人と飲む予定をしていて、その友人が来たら「サグ！ サグ！」と零士が呼び、それがサグラダさんで、サグラダさんは美紀子ちゃんを連れてきていて、なんだかもう何の飲み会なのかよくわからないまま、私は零士の隣でうんうん頷いたり、美紀子ちゃんときゃあきゃあ騒いでみたりして、そんなことをしていたらサグラダさんの名前を聞きそびれて、こつそり零士に聞いても「あいつはサグラダ！」と言つて聞かないし、サグラダさんの前で堂々

と美紀子ちゃんに聞くのも失礼だろうし、じゃあまあ酔ってるだろうからこの際堂々と本人に聞いてもいいかと思つて聞いたらなんか真顔でふざけてくるし、なんだつていうんだ。

「早くー」

美紀子ちゃんが口に手をかざし、メガホンのようにして私たちを呼ぶ。ダウンジャケットを着て、なのに美紀子ちゃんはミニスカートに黒いニーハイソックスを履いていた。寒いのか寒くないのかどっちなんだ。そのスカートはパンツを見せるために履いてるのか。零士にパンツの奥は見せたのか。そんなことばかり考える。ふと、サグラダさんが耳元に囁く。

「さくらださかひこ桜田文彦です」

「あ」

ただ単に私の聞き間違いだったということか。サグラダさんはマフラーをきゅつと結び直し、立ち上がって私を置いて外に出てしまった。私はずしりと重いコートが鬱陶しくなつて、明日ユニクロでダウンジャケットを買おうと思うのだった。

「ねえ、サグラダさんってなんか変だよな？」

さよなら



おと、の名前は豊田和斗彦とよだわとひこという。彼は田舎の大果樹園の一人息子である。

おと、と僕が出会ったのは大学入試のときだった。

試験が始まる十分前にはきっちり着席し、準備万端だと思った矢先のことだった。筆記用具が入っていない。一気に血の気が引いた。

日頃からうっかりしていて（もちろん自覚はあるのだけれど）家族はもちろん学校の先生や友人に、何度も試験の日も確認されたしなんの科目が必要なのかわかっているのかと問われるので、周りがこれだけ心配してくれて、前の晩も散々確認されて、よっぽど大丈夫だろうと思っていたらこれだ。試験会場で借りれるはずだが、十分前とあって誰も席を立っていない。それに、大学側の監督者もいないようで、さっぱり困り果てた。

「なあ、君、筆記用具ないのか」

僕の隣に座っていた、僕よりもずっと大人びて見えた高校生、それがおとだった。髪は黒く短髪で、瞳は切れ長だ。イケメン、というよりも、男前、という言葉が良く似合う。少し独特のイントネーションで、この子は県外から受けに来ているのだろうと察知する。それに、すごく頭が良さそうだし育ちも良さそうだ。暖房があまりきかずにすっかり冷え切った大講堂で、おとは紺色のダッフルコートを着ていたのだけれど、仕立ての良さがすぐに見て取れた。僕が着ている毛玉だらけのベージュのカーデガンとはわけが違う。肯定の意味で頷くと、彼は自分の鞆から黒い筆箱を取り出して、中から緑色の鉛筆を二本と消しゴムを僕に差し出した。二本とも、綺麗に研ぎ澄まされた鉛筆は、こちらの能力をいくらか上げてくれるような気がする。

「……申し訳ない」

「普段はこんなな持ってこないのだけど、なんだか胸騒ぎがして、筆箱ごと二つ持ってきたんだ」

僕とはまったくもって正反対の彼は絶対に受かるだろう。確信が胸をよぎる。彼はお互い頑張ろう、と微笑み、会話が終わった。そして、僕はおとの名前を知らないまま、春、その

大学に入学したのだった。新入生のオリエンテーションが終わって、彼を見つけた僕は、一目散駆け寄ってお礼を言った。すると彼は、

「君の番号も覚えてしまつて、合格発表で見つけたから、自分以上になんだか嬉しかったよ」と、笑った。

それから僕とおとが仲良くなるのに時間はかからなかった。正反対の性格だから合わないかと思つたが、むしろそれが良かったのかもしれない。決して面倒を見てもらおうという魂胆ではなかつただけけれど、ぼさつとしている僕のことを、おとはよく気にかけてくれた。年の離れた妹がいると言つていたし、面倒見が良いのもなんとなくわかる。そのうち僕は「豊田くん」から「おと」と呼ぶようになっていたし、彼も「君」から「お前」に変わった（決して名前を呼ばないのは、僕にだけではなく、彼はみんなにそうだった。が、横柄だといつて不思議と嫌われたりすることはなかった）。学科の授業で一緒に座るのは僕もおとも別の友人だったが、例えばお昼に食堂で彼を見かけたり、構内で帰りがけに彼の姿を見つけたりすると、僕は迷いなく彼を追いかけ声をかけた。おとの方も同じで、僕が一人していると話しかけてくれた。

彼と一緒にいて、何か劇的に面白いことがあるのかというところでもなかったけれど、おとは心配りができるし細かいところに気付くので、一緒にいると嫌な思いを一つもしない。周りに適当で阿呆な友人ばかりの僕からしてみると、おとは聡明で優秀で、別次元からやってきた聖人に思えなくもなかった。

「うちに来ないか。林檎が山のようにあるんだ」

一月の終わり、寒い日だった。おとはあの、受験のときにも着ていた仕立ての良いダッフルコートを着ていて、僕は毛玉だらけのカーデガンと毛玉だらけのマフラーを巻いていた。学校からはおとのアパートの方が近く、寒くて死んでしまいそうだったので蜘蛛の糸のようにも思えた言葉だった。

「おとの家は林檎農家だったっけ」

「違う」

「なんだったかな」

「この会話、何度目だ。お前、覚える気がさらさらないよな」

# さよなら

---

---

平成26年5月5日発行

著者 こんにやく

<http://sbrxsbr.web.fc2.com/>

印刷所 ポプルス

<http://www.popls.co.jp/>

©Konnyaku 2014 Printed in Japan